

福沢諭吉と鎌倉



令和 5 年 1 月 10 日の新年の挨拶で福沢諭吉翁の話をしました。福沢諭吉翁といえば皆さんは何を思い浮かべますか。慶應義塾大学、それとも『学問のススメ』ですか。無論、慶應義塾大学の創立者であり、『学問のススメ』の著者でもあります。それ以外にも蘭学者、洋学者、教育者、啓蒙思想家、明治六大教育家、『西洋事情』の著者、独立自尊、自由、国民、私立のなど観念や概念の紹介、明治維新期の偉人の一人です。この福沢諭吉翁は鎌倉に別荘がありました。彼の別荘は本校の近くにあり、正門より右手に下るとバス通りの県道 304 号線に当たりますが、そのバス通りを渡って腰越中学校の横道を歩いてくと曹洞宗の宝善院があります。その寺の裏手あたりにあったそうです。

福沢諭吉が生まれたのは、江戸時代の天保 5 年 12 月 12 日、西暦の 1835 年 1 月 10 日に生まれ、1901 年 2 月 3 日に亡くなりました。

1835 年、大坂の堂島にあった中津藩(現在の大分県中津市)蔵屋敷の下級藩士福沢百助の次男として生まれました。父は武士ながら儒学者であったこともあり、多くの漢籍の書を読み、暗記し、18 歳の頃には漢学者の前座くらいの実力があったそうです。父が亡くなり、叔父の養子となり一時、中村姓を名乗っていました。

1854(安政元)年、19 歳の時に長崎に出て蘭学を学び、さらにオランダ通詞(通訳)よりオランダ語を学びました。長崎で多くのことを学ぶ、翌年には兄のいる大坂に行きます。大坂を経て江戸に出ようと思っていたのですが、兄より大坂で蘭学を学ぶように説得され、蘭学者・緒方洪庵の適塾に入門することになりました。その兄が亡くなり福沢家の家督を継ぎ、借金の返済により、適塾の学費が払えず、住み込みで蘭学の翻訳などして学費を稼いで学びました。

1857(安政 4)年、福沢諭吉は最年少 22 歳で適塾の十代目塾頭となりました。この適塾期にファラデーの法則を知ったり、アンモニアの製造を行ったりしました。

1858(安政 5)年、中津藩から彼に対して江戸出府を命じられ、江戸の中津藩屋敷にあった蘭学塾の講師となりました。蘭学塾「一小家塾」こそが、後の慶應義塾大学の基礎であり、この 1858 年を以て慶應義塾大学創立の年とされています。

翌年、7 月 29 日(安政 5 年 6 月 19 日)に日米修好通商条約が結ばれると、福沢諭吉は開港地の横浜に赴いた。自らが学んだオランダ語の成果を試みようと思いました。日

米修好通商条約の言語は、日本語、英語、オランダ語であったが、横浜で用いられているのは専ら英語であり、彼が学んだオランダ語は使われておらず、通じなかった。このとき彼は非常に大きなショックを受けたと言われています。福沢諭吉が英語を学べなかったのは、日本は長く鎖国時代が続いた関係でオランダ語以外の書物を入手するのは困難でした。この頃、蘭学者のなかには、英学、英語を学ぶことに躊躇したり、蘭学に専心したりする者が多くいました。福沢諭吉は蘭学だけではなく、英学、英語も独学で学んでいきました。

1808(文化5)年、長崎で起こったイギリス軍艦フェートン号事件以来、日本ではイギリスやアメリカに関する研究の機運はありましたが、1851(嘉永4)年にアメリカより帰国したジョン万次郎(後の中浜万次郎)が薩摩の洋学校、土佐の藩校で英語を教えていたくらいでした。

福沢諭吉は1859年、日米修好通商条約の批准交換のための幕府使節団に加わり、咸臨丸に乗船してアメリカのサンフランシスコに渡り、その後パナマ鉄道で大西洋側の港アスピンウォールに行き、アメリカ軍艦に乗船してワシントンに到着。そしてフィラデルフィア、ニューヨーク、ヨーロッパ、喜望峰、バタビア(ジャカルタ)、香港を経由して帰国しました。

洋行を経験した福沢諭吉が1866(慶應2)年に『西洋事情』(初編3冊)を刊行しました。その内容は、政治、税、国債、会社、外交、軍事、科学技術、学校、新聞、図書館、病院、蒸気機関、ガス燈、電信などが紹介されました。この『西洋事情』は多くの人に読まれましたが、偽物も多く出まわりました。1868年、福沢諭吉は新聞に広告を出し、版權という観念を初めて日本に示したといわれています。

福沢諭吉の影響を受け、英学、英語だけでなく、大陸系のフランスやドイツなどの語学や政治、法律、文化を教授する学校も生まれてきます、例えば、中央大学の前身は英吉利法律学校、法政大学の前身は東京仏学校(もう一つは東京法学社)、獨協大学の前身は獨逸学協会学校です。

福沢諭吉は横浜に出てきて、自らのオランダ語が使われていない、使えない経験をしました。しかし彼は、そこで挫けず英学、英語を学んだことで渡米・渡欧を経験し、明治維新期の偉人になりました。失敗やミスした時こそ、客観的に自らをみる力が必要です。彼のような先見の明、不屈の心、健全な身体、振る返る力を備えたいですね。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」は福沢諭吉翁の言葉です。この言葉、アメリカ独立宣言の序文を意識したものと言われています。この言葉の後には、現実には平等でなく、貧富の差があることが記されています。だからこそ、勉強するのはです。ゆえに学問を勧めるのです。

(福沢諭吉翁の写真は Wikipedia より)